The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

最澄・空海請来になる姚鬯撰『三教不斉論』より得られた知見について

藤井　淳

近年検出され、翻刻がなされた姚鬯撰『三教不斉論』は、唐代三教交渉の文献であるという希少性はもちろんのこと、伝教大師最澄・弘法大師空海の二人によって請来されたという重要な意義をもっている。本稿ではその検出にともなって新たに得られた知見について述べる。なお姚鬯撰『三教不斉論』検出の経緯および石山寺本の翻刻については藤井淳［二〇一一］を参照されたい。

一　最澄関係についての知見

①『三教不斉論』書写日付の問題と『天台法華宗伝法偈』

前盧州参軍姚鬯定三教論其本甚脱錯
大暦九年三月廿八日故之大唐貞元廿
年十一月十六日写竟台州臨海懸龍興
寺北房日本國求法僧最澄（翻刻三四九～三五二行目）

右の石山寺本（一四九七年に石山寺の僧侶・源雅によって書写）の奥書によると最澄が『三教不斉論』を書写したのは「貞元廿年（八〇四）十一月十六日」とされる。この日付からは最澄撰とされていた『天台法華宗伝法偈』による最澄の台州での記録と興味深い関連が見出される。

十一月五日　與二行満大師一　共下二於州底一　却帰二龍興寺一　道邃大師室一　同月十三日　台州陸郎中　恵二四千張紙一　処二分龍興寺　経生二十人一　書二写先師教一　自二十一月一起　至二二十四年　春二月尽日一　稟二止観大旨一　……(1)

これによると最澄は十一月十三日に台州の長官である陸淳より四千張の紙を贈られ、それによって経生二十人とともに龍興寺において書写を行ったことが知られる。先の石山寺本『三教不斉論』の奥書と比較すると陸淳の紙の贈呈から三日後に『三教不斉論』の書写を終えていたことになり、紙の調達からほぼ一番目に最澄自身が書写したものは『三教不斉論』になると言えよう。紙は書写に当たっては必須のものであるから紙の調達と『三教不斉論』書写の日付がほぼ連続していることは注目される。しかし『天台法華宗伝法偈』には著者

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の信憑性の問題が存するので注意も必要である。大久保良順「一九八〇」によれば、『天台法華宗伝法偈』は所々に合理的な部分もあるが、仁忠『叡山大師伝』、円珍『比叡山延暦寺元祖行業記』に影響を与えず、口伝法門の四箇大事の重要語が用いられ、また現存記録と一致しない部分があり、安然が『教時諍論』『教時諍』で言及せず、比較的古いものであるが最澄の著作ではないとされる。そして現在は一般的には『天台法華宗伝法偈』は最澄真撰とは考えられていない。

一方で石山寺本『三教不斉論』奥書には特に造作の跡は考えられず、『天台法華宗伝法偈』には一部合理的に理解できる個所もあることから、ここでは『天台法華宗伝法偈』が最澄の中国での活動を記述する際には何らかの記録を元にしたのではないかという可能性を指摘しておく。また最澄は当時流行した中国の円密戒禅の四つの教えを伝えており、禅の流入はその後鎌倉時代まで途切れることと、当時の中国禅で「伝法偈」が重視されていたことも『天台法華宗伝法偈』の成立には合わせて考察する必要があろう。

②『台州録』と『越州録』の関係および早稲田大学蔵（石山寺旧蔵）『日本国求法僧最澄目録』

先に示した石山寺本『三教不斉論』の奥書からは最澄が台州龍興寺にて書写したとされる。しかし『三教不斉論』は、最澄の将来目録である『台州録』『越州録』（この名称についての問題は後述）のうち、『越州録』に載せられており、一見すると矛盾するように思われる。このことから『台州録』『越州録』の性格について検討したい。常識的には『台州録』『越州録』はそれぞれ最澄が台州・越州で蒐集した経論疏を記したと考えられる。内訳は最澄の真筆と考えられる古写本が現存する『越州録』冒頭の記述によると、台州での蒐集一百二十八部三百四十五巻、越州での蒐集一百二部一百一十五巻の合計二百三十部四百六十巻である。[2]『台州録』は古写本が現存し[3]ないとされ、従来は浄土院蔵版が元になって考察されているが、末尾に「百二十部、三百四十五巻」[4]と記される。一方、『越州録』末尾の記録では、台州で得たものは概数（数百巻文書）として示される。

最澄等、深蒙二郎中慈造一、去年向二台州一、両僧等受二大小二乗戒一、又写二取数百巻文書一。今年進二越府一、二僧入二五部灌頂壇一、又抄二取念誦法門一、前後都総二百三十部、四百六十巻也。[5]

『台州録』は内容を検討すると天台関係の著作が中心となっている。そして『越州録』の記録では台州で集めた「文書」の数は概数（数百巻）で示されている。そこで以下のように推測できる。最澄は『越州録』には越州で集めた経論疏のみならず、台州で集めた天台関係以外の文献を併せて挙げたと考えられる。天台求法は最澄渡唐の第一の目的であるから、『台州録』には帰国後に朝廷・寺院などに書写を依頼する関

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

係からも紙数（八千五百三十二紙）[6]まで記し、意図的に天台関係の文献を集中させたのであろう。（一方『越州録』には合計の紙数は記されない）そして最澄は『越州録』には越州で集めた文献のみならず、台州で蒐集し、『台州録』に挙げなかった文献も併せて挙げたと考えられる。

ここで『台州録』『越州録』という名称を用いてきたが、これらの名称について若干の注意を喚起したい。というのも両者の名称は文政四（一八二一）年刊行の浄土院蔵版に「伝教大師将来台州録」「伝教大師将来越州録」として見られるが、これらは「伝教大師」と付されていることから知られるように後代の名称である。一方早稲田大学図書館に所蔵される承安元（一一七一）年の『日本国求法僧最澄目録』（石山寺旧蔵・良祐写）によると通例とは逆に、いわゆる『越州録』『台州録』の順に記され、「伝教大師将来台州録」「伝教大師将来越州録」の名称は見られない。つまり『台州録』『越州録』として我々が理解している名称は後代のものであり、名称から「『台州録』には台州で『越州録』には越州で蒐集されたものが載せられている」という固定観念を抱く必要はないのである。『台州録』『越州録』という名称はおそらく、それぞれの跋文の記事を参照して浄土院蔵版を刊行する際に付けられた名称ではないだろうか。この点については今後最澄目録の古写本を調査して行く過程の中でさらに考察していきたい。

③　比叡山御経蔵における位置

石山寺本『三教不斉論』は元亀二（一五七一）年の織田信長による比叡山焼討の約七十年前の明応六（一四九七）年に石山寺の僧侶である源雅によって書写されたものである。書写の場所は不明ながらも、当時石山寺の僧侶は比叡山および坂本の経蔵を訪れていたことが知られるから[7]源雅は最澄の奥書のある『三教不斉論』を天台宗系の僧侶の協力によって書写したと考えられる。それでは『三教不斉論』は比叡山周辺の何処に存したと考えられるであろうか。比叡山の経蔵についての詳しい記録も残念ながら存しないが、最澄の将来した経論疏は御経蔵とよばれる経蔵に置かれていたことが知られている。『三教不斉論』は『御経蔵宝物聖教等目録』（弘仁二年七月十七日、叡山止観院、佐藤哲英「一九八〇」五二三頁）にある全二十八帙（『台州録』二十一帙・『越州録』七帙）[8]のうち、第二十六帙（天台雑文并達摩宗雑文一帙・『越州録』雑三）に置かれていたと考えられ、鎌倉末期の目録[9]によっても全二十八帙の位置はほぼ同じであったことが知られる。もちろん源雅が直接比叡山の御経蔵の写本から書写した証拠は存しないが、元亀二年までは御経蔵中で『三教不斉論』が置かれている場所は決まっていたはずである。つまり仮に源雅が御経蔵より『三教不斉論』を借り出すことができたとすれば、それを天台宗の僧侶に探し出してもらうのは容易であったはずであ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る。ちなみに最澄将来本のうち唯一現存する『曹渓大師伝』（延暦寺蔵・国宝）も同じく第二十六帙に納められていたと考えられる。

④ **台州龍興寺北房**

台州龍興寺には「西廂極楽浄土院」があることが知られていた（『菩薩戒血脈』[10]）が、石山寺本奥書によれば台州龍興寺に他に「北房」が存在したことが知られる。他に類例がないことからもこの奥書には信憑性があると言えよう。

二　空海関係についての知見

① 越州での収集活動

空海は最澄が越州を発った後に、長安より帰国途上で越州に立ち寄り、越州の節度使に「内外」（仏典と外典）の経論疏を集める依頼状を書いている。従来は特に注目を集める記述ではなかったが、『三教不斉論』の検出を経て再度読み直してみるといくつか注目される記述がある。

「与越州節度使求内外経書啓一首」『性霊集』巻第五

今見於二長安城中一、所二写得一経論疏等、凡三百余軸、…

三教之中、経律論疏伝記、乃至詩譜碑銘、卜医五明、所摂之教、[11]

これ以外にもこの書状には「儒童迦葉」「仲尼」など孔子を意識した記述が見出せる。そして『御請来目録』の巻数「四百六十一巻」[12]と比較すると空海は越州で百巻近くを蒐集したと推測される。そこで空海はどのような目的で何を収集したのかを考察してみたい。証拠としては存しないが、空海は越州に立ち寄った際に、最澄が越州に残した目録を見たのではないだろうか。というのも日本に経論疏を持ち帰るには現地の長官の承諾が必要であり、それが陸淳と鄭審則の印信であり、最澄の将来目録の写しは越州に存したであろう。そして、空海はその目録を見て越州で天台関係の著作五十二巻を中心に、また『三教不斉論』をも蒐集したと考えられる。空海の『御請来目録』では天台関係の文献がやはり異質であり、そして実際に帰国後に最澄は空海より「法華文句疏二部二十巻〈天台智者撰〉」「法華記一部十巻〈天台湛然法師記〉」を証本のため借り出しを申し入れている。[13]空海は最澄が『三教不斉論』を日本に将来していることを知り、『三教指帰』以来存した三教論への関心が再び呼び起こされ、それが越州の長官へ宛てた依頼状の文面に現れているのではないだろうか。空海は帰国後に十住心教判へと思想を展開させていく中で、最澄の活動より影響を受けたと私は考えている。[14]空海が最澄を意識したのは既に中国・越州において端を発していると考えたい。

② 真言宗寺院での『三教不斉論』

石山寺の場合、室町時代に空海請来の経軌を集める活動が行われたが、真言宗寺院では東寺や醍醐寺においても請来本

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

を集めていたことが目録[15]から知られる。今後も『三教不斉論』写本が検出される可能性があり、調査を継続していきたい。

1 『伝教大師全集』第五巻二八頁（平成復刻の世界聖典刊行協会版による）。
2 『伝教大師全集』第四巻三七一頁。
3 古川英俊［一九四二］。
4 『伝教大師全集』第四巻三六七頁。
5 『伝教大師全集』第四巻三八一頁。
6 『伝教大師全集』第四巻三六七頁。
7 藤井淳［二〇一一］十頁。
8 『伝教大師全集』第四巻三四五頁。
9 「御経蔵櫃目録」（文永以後の鎌倉末期と推定・佐藤哲英［一九八〇］五二〇頁）第一～第二十八函までは第六（正念法経六帙）、第二十三（中檜櫃大体空納之）を除いて注記がない。佐藤哲英氏は自明とされるのか指摘がないが、「御経蔵櫃目録」に所載される第一から第二十八函までは『御経蔵宝物聖教等目録』所載の伝教大師将来のものと考えられる。
10 『伝教大師全集』第一巻二三六頁。
11 『定本弘法大師全集』第八巻八三―八四頁。
12 『定本弘法大師全集』第一巻五頁。
13 『伝教大師全集』第五巻四五八―四五九頁、『定本弘法大師全集』第一巻二七頁。
14 藤井淳［二〇〇八］。
15 小原仁［二〇〇六］、東寺一切経蔵之内請来録内儀軌等五箱目録（『昭和法宝総目録』第三巻七八七頁中段）の第四箱。

〈参考文献〉
「伝教大師関連年表」『伝教大師研究別巻』天台学会
大久保良順［一九八〇］「天台法華宗伝法偈について」『伝教大師研究』
小原仁［二〇〇六］「『三宝院経蔵目録』（二）」『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第二一号
佐藤哲英［一九五三］「初期叡山の経蔵について　新出の『御経蔵目録』『御経蔵櫃目録』を中心として」『仏教学研究』八／九
佐藤哲英［一九八〇］「伝教大師の仏典収集とその保存」『伝教大師研究』
藤井淳［二〇〇八］『空海の思想的展開の研究』トランスビュー
［二〇一一］「姚鼐撰『三教不斉論』（石山寺所蔵）写本の翻刻」『高野山大学密教文化研究所紀要』第二四号
古川英俊［一九四二］「伝教大師台州将来目録の研究」『叡山学報』二十

本稿の執筆（特に石山寺本について）にあたっては高野山大学密教文化研究所参事の田寺則彦氏の御教示を得た。
『日本国求法僧最澄目録』（良祐写）は早稲田大学図書館のホームページ上にて全文カラーで公開されている。使用の許諾をいただいた同図書館に厚く御礼申し上げる。
（本稿は松下幸之助記念財団の助成を受けて執筆されたものである）

〈キーワード〉　最澄、空海、『台州録』、『越州録』、『三教不斉論』

（駒澤大学専任講師・博士（文学））

NII-Electronic Library Service